

これからの建築士賞

審査委員からのメッセージ

平成 27 年 2 月 17 日 (火) @東京建築士会会議室

吉良 森子 (アムステルダム設計事務所／神戸芸術工科大学客員教授)

審査員 倉方 俊輔 (建築史家／大阪市立大学准教授)

中村 勉 (東京建築士会 会長／中村勉総合計画事務所)



建築士が携わるこれからの芽になる価値ある活動を掘り起こし、支援していきたいということで「これからの建築士賞」という新しい賞がスタートします。本日は第一回の審査委員の皆様にお集まりいただき、賞の在り方について話をいただく機会を設けました。建築士は仕事を受注する設計者や監理者、施工者だけではなく、発注者、行政サイドにもいます。しかし建築を頼む段階「発注」に、建築士の技術、知見、知識などが十分生かされていないことも現実。それもこの賞を設立した、一つの背景としてあります。建築士という専門性をもった人材の社会での役割論、位置付けを考えたい。それを賞として、社会の中から見つけ出す。建築作品賞のように、価値観を競い順位付けするのではなく、多数、複数の活動を紹介するようイメージしています。その議論の「場」、メディア(媒体)として、この賞やその審査はあり、ぜひとも多くの応募・推薦につながる議論をお願いします。

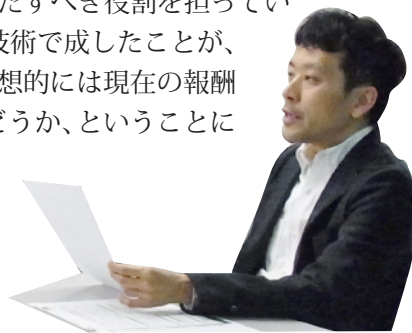
(佐々木龍郎／司会・進行)

吉良 森子 これまでの拡大していく社会の中では、建築家は建てることであれば良かったのですが、縮小社会では建てないという可能性も視野に入れて、建てる行為を超えた住まいやコミュニティの問題に、具体的に答えることが求められています。これは日本もヨーロッパも同じ状況にあると思うのですが、どちらでもそのことが建築家の職能としてまだ確立されていません。ですから、そのような新しい職能が見えてくるような、これからの可能性がみえてくるような活動を選んでいくことができれば、と思っています。状況は拡大してきた時代とは全く異なりますが、でも、ダイナミズムとしては同じくらいのスピード感のある変化がこれから起こっているのだと感じています。「大きな物語」の変化がいま、建築の領域に起こりつつあるのです。その状況を背景に、建築、建築の仕事、建築の可能性をディスカッションすることができたらとても刺激的だと思います。



※吉良氏は、アムステルダムから Skype での参加となった。

倉方 俊輔 「これからの建築士賞」の評価の基準は、正しく「現在の建築士」であるかどうか、だと捉えています。従来から、さまざまな建築団体が、正しく「現在の建築」であるか、「現在の建築学」であるか、「現在の建設」であるかといった基準で、優秀作の顕彰を行ってきたといえます。「これからの建築士賞」は、これらと違う基準によって、いかにも建築士の団体らしい役割を果たすに違いありません。評価基準の要点は、現在の「建築士」が果たすべき役割を担っているかでしょう。一つは、まず、クライアントの要求と社会の有り様に応えて、プロの技術で成したことが、効果的にその場で働き、活性化させているかどうか。もう一つは、そうした行為が理想的には現在の報酬に、あるいは建築士個人や建築士全体に返ってくる未来の報酬につながっているかどうか、ということになります。この「未来の」というあたりが、賞の名称に「これからの」と付いている理由のはず。以上は、建築士が建築物の設計行為を行うという法的保護と責任の拡張であり、その現代版です。このように「これからの建築士賞」は、論理的にも、東京建築士会がなすべきことの「ど真ん中、ズバリ」。第1回が成功し、賞が軌道に乗ることを待望しています。



中村 勉 これからの社会を考えるには、政府や自治体頼みではなく、コミュニティとか、出来るだけ小さな社会単位で、自分で引き受けて、どうしたらいいかという、具体的な行動を起こしていかなければ、先にすまないでしょう。そのためには、いろいろな試みが必要です。「これからの都市」も考え、具体的にかかわることが必要でしょう。例えば、2050 年にはどういう都市が良いのかを見すえ、いまの私たちの現実的な行動として、そのために何ができるかを考えてほしいと思います。それをこの賞は問うています。何かそれに対するヒントを見つけれたらいい。そのように、私は思っています。